

狂言台本における意外性標識：  
疑問詞「何」に基づく一語文的表現の実態

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深津, 周太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027268">https://doi.org/10.14945/00027268</a>

# 狂言台本における意外性標識 —疑問詞「何」に基づく一語文的表現の実態—

深 津 周 太

キーワード：意外性 疑問表現 「何」 一語文 感動詞

## 1 はじめに

時代を問わず、対話相手への“問い返し”を行う際に、その発話内容への意外性・驚き<sup>1</sup>を表すために疑問詞「何」<sup>2</sup>に基づく一語文的表現が前置されることがある。

- (1) a. アドアイ「勸進帳をあそばされ候へ、これにて聴聞申さうずるにて候 シテ なにと勸進帳を読めとや、心得申して候

(謡曲・安宅)

- b. 飯「それはまア有難いこと、差上げたいね 相「ナニ下さる、あゝ有難かつた (三遊亭円朝・牡丹灯籠)

(1) からも分かる通り、これらは音声的に聞き取れなかった内容の確認を目的とするものではない。また具体的な問いを後続させている以上、それ自体が問い返しの機能を果たしているのでもない。あくまでこの表現の機能は相手の発話内容に対して「意外である」という態度を示すのみである。このように疑問詞「何」を用いて意外性を標示する一語文的表現を、本稿ではその談話上の機能から“意外性標識”と呼ぶこととする。

この表現は、(1) に示したように通史的に見られるものであり、使用される形式やその用法は時代ごとに異なる様相を示してきたことが予想される。意外性標識の歴史全体を描画することを視野に入れつつ、その端緒となる本稿では、

---

<sup>1</sup> 「相手の発話の意味する所の真意・妥当性が把握しかねる」(仁田1991:142-143) ことによるもの全般を指すこととする。

<sup>2</sup> 以下、本稿では「何」の音形(なに/なん)は区別せず扱う。

17世紀の狂言台本を頼りに近世初期における当該表現の実態を確認する。当期の口語資料として有用なものうち狂言台本を選んだのは、一対一の対話を中心とするという性質上、問い返し文脈が多く現れることが期待できるためである。舞台芸能ならではの言い回しが存在する点には注意が必要であるが、それを差し引いても、歴史的研究の軸とするには最適の資料であると言えよう。

あらかじめ断っておくと、本稿は厳密な共時的記述を志向するものではない。ここで目的としているのは、[1] 台本間の差異を明らかにすることでそれらの関係を適切に位置づけること、[2] そこから読み取れる事象の先後関係に導かれながら通時の研究の足掛かりを得ること、の二点である。

## 2 資料

今回対象としたのは17世紀成立の狂言台本である。以下に各台本の概要を示す。

流派	書名	成立年	所収曲	内容
大蔵流	虎明本	1642年	237曲	ほぼ台詞
和泉流	天理本	1645頃	227曲	筋書きが主で一部台詞
鷺流	忠政本	1678年	25曲	ほぼ台詞だが内容省略あり
刊本	狂言記	1660年	50曲	ほぼ台詞
	狂言記外	1700年	50曲	ほぼ台詞

一口に狂言台本と言っても、それぞれの資料性は異なる。『虎明本』が台本としてほぼ完全な詞章をもつのに対し、『天理本』や『忠政本』はその多くがト書きによって示されたり、構成が類似した曲は前半部が大きく省略されていたりと、簡略化されたテキストとなっている。本論中で示すデータにおいて『虎明本』の用例数が多くなっているのはこのような事情によるところが大きい。また、読み本として刊行された『狂言記』『狂言記外』はテキストとしては充実しているが、特定の流派の台本ではなく集成であるため曲によって資料性が異なるといった特徴を持つ点に注意が必要である<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 『狂言記外五十番』は18世紀の成立であるが、古相を反映していることが夙に指摘されているためここに含める。また、『虎明本』と同時期の大蔵流台本である『虎清本』(1646年/8曲所収)には用例が見られなかった。

### 3 問い返し疑問について

#### 3.1 問い返しとは

本稿で扱う意外性標識とは“問い返し疑問に前置されるマーカー”である。ここでまずは、意味内容面において発話の核となる問い返し疑問のあり方について見ておく必要がある。現代語研究に目を向けると、仁田（1991）が問いかけの疑問表現の一つとして「問い返し疑問」を立てている<sup>4</sup>。

- (2) 不明なところが存在し、かつ、それを聞き手に問いかけてはいるものの、その不明な部分が話し手の構築しつつある判断にあるのではなく、不明な部分が、言語表現として相手の発話は了解しているが、その真意、意味する所や妥当性が把握しかねたり、使用されている単語の指示対象が把握しかねる、といったあり方で、相手の発話に存在し、その不明な部分を相手に問い返し、といった疑問表現がある。この種の疑問表現を〈問い返し〉と呼ぶことにする。〈問い返し〉には、相手の発話の先行が前提になる。〈問い返し〉は、その真意、意味するところや指示する所の把握できなかった相手の文および文の一部を繰り返すことによって行われる。〈※下線・二重下線は筆者による〉

(仁田1991:142)

ここでは、①直前の相手の発話内に疑問の焦点があること（→下線部）、②形式的にはその部分を繰り返すこと（→二重下線部）、の二点が問い返し疑問の条件として挙げられている。本稿もこれに従うこととする<sup>5</sup>。

同様の条件を認める安達（1989）は、問い返し疑問には上記②の性格から特徴づけられる二つの類型があるとする。一つは（3a）のように相手の発話に現れる言語表現そのものを問題とするもので、もう一つは（3b）のように「直前

---

<sup>4</sup> 仁田（1991:144）は「相手の言語表現としての発話そのものが、了解できないことによる」問いを「聞き返し」とし、「問い返し」とは異なるものとして扱っている。本稿も同様に、以下のようものは除外した。

- 太郎冠者「…なふいかめのおにがまいつて、なふ 主「何と 太郎冠者「いやおにがまいつてござる (虎明本・しみづ)
- 名取の何某「扱もきたいな事を云人じや 出家「何と 名取の何某「いやきたいな事を云人じやと云事よ (虎明本・名取川)

<sup>5</sup> 近藤（2001）は、「誰もいないと思って登っていた沢で、なにか人の気配を感じて」「人がいる?」のように先行する発話がない（発話者がいない）表現に着目し、これを事態が「先行想定」と対立することで生じる「意外である」という認識によって生じるものと見て、その観点から問い返し疑問と包括的に扱うことを試みている。本稿では、ひとまず相手がいる場合に限る。

発話のコトガラの意味内容」を問題にするものである。

- (3) a. 「うちの息子が、昨日、熱を出しましてね」「うちの息子？」  
b. 「うちの息子が、昨日、熱を出しましてね」「お宅の息子さんが？  
／\*うちの息子が？」

前者が問題とする表現内容をそのままの形で直接引用して問い返すのに対し、後者はダイクシス変換やハ／ガの変換など、いったん問い返す側の視点から捉え直した形で間接引用的に問い返すという性格をもつ。本稿ではどちらも含めることとするが、大半は何らかの変形を加えたものであった。

- (4) a. 酢売「身共はすを商売する者であるよ 薑売「何と酢うりじや  
酢売「中々、おんでもなひ事 (虎明本・酢はしかみ)  
b. こぶ売「いやもちませう アト「なんじやもとふ。これはざれ事  
はいやな御ざれ事で御ざる (狂言記外・昆布売、一14才)

(4a)は「酢を商売する者」を「酢売り」と言い換え、(4b)は「もちませう」から丁寧語を取り除き「もとふ」としたものである。特に(4b)のように待遇表現に関する変換を加えたものが目立った。

## 3.2 狂言の問い返し疑問

3.1をふまえて、狂言台本の問い返し疑問を整理しておこう<sup>6</sup>。形式面に着目すると、引用マーカーの「ト」を用いるか否か／文末形式を伴うか否か、という素性によって大きく三つのパターンに分類することができそうである。

### ①【-引用マーカー／+文末形式】

#### A〈体言+じゃ〉

- (5) a. 閻魔王「某こそぞごくのあるじ、焰魔大王さまよ 朝比奈「何えんまわうじや (虎明本・あさいな)  
b. 次郎「やい太郎くわじやなんとした 太郎「さとうじや 次郎「なんじやさとうじや (狂言記外・ふす、三12ウ)

#### B〈体言+か〉

- (6) 孫二「申々はや此所で御ざある 祖父「何といふぞ此所か

<sup>6</sup> 以下のような「何と～とは」は、「とは何と」の倒置表現であり、「心やすいとはどういうことか」「物をはせひとはどういうことか」の意味であるため、問い返し表現には含めない。

• 入間「扱はこゝろやすいよ 大名「何と心やすいとは (虎明本・入間川)  
• 太郎冠者「あゝまづものをいはさせられひ 夫「何と物をいはせひとは (虎明本・はなご)

(虎明本・やくすい)

C 〈用言+か〉

- (7) a. 饅頭売「扱々むまひ事でござる 大名「何とむまひか《「わらふ」  
饅頭売「中々おもひよらぬおふるまひで御ざる

(虎明本・まんぢう)

- b. こふうり「つかのはうからおくせ アト「やりやうが気に入らずは  
おこふまで こふうり「何おくすまいか

(狂言記外・昆布売、一15ウ)

②【+引用マーカー／+文末形式】

A 〈～と言うか〉

- (8) a. 「…五日の逗留にて、よそへ行ほどに、留守をよふせいと云「何  
と、よそへ御ざると、仰せらるゝか

(天理本・見す聞かす、上113オ)

- b. はしかみ「そちが其すなどには。けいづが有まひ。す「いや。す  
にこそけいづがおぢやれ。はしかみ「なんぢや。すにもけいづが  
有といふか (狂言記・すはしかみ、一31ウ)

B 〈～とや〉

- (9) a. 茄子の精「あらおかしや、さくもうのうへにこそ、はしりほなどゝ  
は申せ 橘の精「何とわれらが申たるがおかしひとや

(虎明本・このみのあらそひ)

- b. 「なふ／＼、そなたへ、四十計なる女の、包みなどを、戴ひて、行  
かぬか——何、そなたへも、行かぬとや

(天理本・法師母、139ウ)

③【-引用マーカー／-文末形式】

〈φ〉

- (10) a. シウト「…さりながら、最前、鞍馬の毘沙門、天王の、御出にて  
候「何と、毘沙が、来た (天理本・夷毘沙門、上46オ)

- b. 朝比奈「さあらは浄土へ道しるべをさしめ 閻魔王「何じやうど  
へのみちしるべせひ 朝比奈「あふ中々 (虎明本・あさいな)

①は文末形式のみを伴うタイプで、①-Aと①-Bは相手発話中の体言に焦点を当てた問い返しである。文末形式には「じゃ／か」の2種が見られたが、今回の調査範囲では疑問辞「か」を用いたものは(6)の1例のみで、残る12例

はすべて断定辞「じゃ」であった。①-Cは、用言を文末形式「か」で受けたものである<sup>7</sup>。

②は疑問の焦点を引用マーカーによって受け、かつ文末形式を伴うタイプである。安達(1989)が問い返し疑問には本質的に引用としての性格が備わっていることを指摘しているように、それがこのような形をとるのは自然であろう。

③のように引用マーカーも文末形式も用いず、内容を単純におうむ返しするだけのものを〈φ〉タイプとする。これは、(10a)のような平叙文や(10b)の命令文といった文をはじめ、節や語のみを取り出すことも可能で汎用性が高い。

今回確認されたのは以上の3タイプであり、狂言台本全体を通して【+引用マーカー／-文末形式】というタイプは見られなかった。

以上を狂言台本の問かけ疑問とみなす。このことを前提に、次節ではそれに前置される意外性標識にどのようなものがあるかを具体的に見ていくこととする。

## 4 意外性標識について

### 4.1 各形式の外観

#### 4.1.1 《何と言うぞ》

まず、発言動詞「言う」を用いて疑問詞疑問の形をとるものがある。以下、この形をとる意外性標識を《何と言うぞ》とする。形態としては疑問文の形をとるが、実際には疑問の意味を含まず(何と言ったかを問うものではなく)、相手発話への意外性を示すものである。

(11) a. 孫一「いかにおうぢご、孫共がおもてへまいつた、でさせられい  
祖父「何といふぞ、まご共が見まいにきたといふか

(虎明本・やくすい)

b. 孫一「…くすりの水をしんじ、わかくなひてしんぜうと存じ、兩人ながらまいつてござるぞ 祖父「何といふぞ、此国の者に、此おうぢをやしなひ子にやつて、わかうなさうと思ふて、つれにきたといはしますか 孫一「扱々耳がとをふなつて、すじもなひ事

<sup>7</sup> 「天理本」の上欄書入れに「命令形+か」の例があるが、これ1例であるうえ、後からの書き入れであるため除く。文脈的にも「宮城野」を「土産にせい」と無理に聞きなす軽口めいたものであり、自然な表現でない可能性もある。

• 是は、宮城野から、参つたと云 《上覧書入：なにとみやけにせいかと云 いやみやきのと云時、たれもしつたと云》 (天理本・萩大名・上213オ)

を御申しやる

(虎明本・やくすい)

c. 孫二「申々はや此所で御ざある 祖父「何といふぞ此所か

(虎明本・やくすい) ※再掲

これは「副詞＋用言」という構造をなすものであって、他タイプのような一語文的表現とは言いがたいかもしれない。しかし、談話上の機能から見れば他と異なることはないため、これらも意外性標識として同列に扱うこととする。なお、狂言台本の範囲では『虎明本』への出現に限られ、かつ特定の曲（「やくすい」）にしか見られなかった。やや特殊なニュアンスをはらむ表現であった可能性を指摘しておく。

#### 4.1.2 《何と》

次に、発言系の動詞を後続させず副詞「何と」のみの形で現れるものを挙げよう。以下、《何と》とする。

(12) a. 茶屋「爰は一ふく一せんの所じや、茶の錢おいておじやれ 出家  
「何と茶の錢をとらふとおしやるか (虎明本・さつまのかみ)

b. 「鯉をも進じまらせうず、恋をなさるゝと、申と言ふ シテ「何と  
と、祖父が恋をする アト「さやうに申と云

(天理本・枕物狂、下109ウ)

c. くわしや「おやのゆづりをかれまらしたしびりがおこつて。あゝ  
いたや／＼かなしや／＼ 主「何としびりがきれたといふか

(狂言記外・しびり、二10オ)

この《何と》は、4.1.1で見た《何と言うぞ》の「言うぞ」を非表示とした共時的なバリエーションと考えられる。(12) のようなものは、山口(1990:132)の言うところの「一面ではなお疑問表現でありながら、感動語・呼掛語・応答語への傾きが認められる」段階にあるものと言えよう。この《何と》がその後、意外性・驚きという側面をさらに特化させた結果、完全に感動詞化すると考えられる<sup>8</sup>。このことは、本稿とは別に論じることとしたい。少なくとも当期までに見られる当該表現は、相手の発話を受けてのものに限られるため、疑問詞としての用法(＝意外性標識)の範囲にとどまっていると見るべきであろう。視覚的に得た情報に対して用いられたり、前提となる相手の発話なしに用いられ

<sup>8</sup> 沖森(2015)では、「評価的に中立(驚きを表す)な「情動的感動詞」の一つとして「なんと」が挙げられている。これは「新情報遭遇という文脈での広義の反応として、単独に使用できる」とされる。



たりしてはじめて、感動詞化したと行うことができる。と考える。

### 4.1.3 《何じゃ》

次に、「何」を断定辞「じゃ」で受けるものが挙げられる。以下、《何じゃ》とする。

- (13) a. 麻生「是はなんとするぞ 藤六「是はきやうりせんで御ざる 麻生「なんじゃきやうせん〔じ〕脱字や 藤六「いやきやうりせんと申て、ごたいつけの下へぬらひではかなはぬ物でござる  
(虎明本・あさう)
- b. ソウシヤ「…名を申上よとの、御意じやと云 アワチ「つうじと申と云 シテ「何じやつうじじや、この旋毛(つじ)かと云て、頭を教ゆる  
(天理本・三人夫、下13オ)
- c. はしかみ「そちが其すなどには。けいづが有まひ。す「いや。すにこそけいづがおぢやれ。はしかみ「なんぢや。すにもけいづが有といふか  
(狂言記・、一31ウ) ※再掲

断定辞「じゃ」の成立は15世紀後半とされており<sup>9</sup>、この《何じゃ》も他の意外性標識よりも相対的に新しいものと考えられる。

ところで、断定辞「じゃ」を孕む《何じゃ》は、上位者に対して用いることができない。この点は、「言う」部分を敬語化できる《何と言うぞ》や、そもそも形態的に待遇性を明示しない《何と》(及び後述の《何》)のようなものとは異なる性質であるように思われる。ただし、意外性標識全体を見渡しても、〈下位→上位〉の使用例はほとんど見いだせない。こうした待遇表現に関わる諸点は意外性標識・あるいは問い返し疑問の歴史を考察する上で重要な意味を持つように思われる。今後の課題としたい。

### 4.1.4 《何》

最後に、「何」単独で使用されるものを見ておく。

- (14) a. 朝比奈「某こそあさいなのなながしよ 閻魔王「なにあさいなのなながしじや 朝比奈「さては  
(虎明本・あさいな)
- b. 「やい／＼。おんなども。たのふだお方の御ざつた。酒を出せ。なに酒がない。そのかわらけいろも。茶のあわせも。もてゝちや

<sup>9</sup> 信太(1998)など。

つと。かゝてこい (狂言記・五21オ、ふじまつ)

c. こふうり「此こぶをうれ アト「侍のこぶをうった事はない こ  
ふうり「何うるまい (狂言記外・昆布売、一15ウ)

「何」の一語文用法について、山口(1990)はこの語が「相手の発言を受けて用いられる場合、その発言への感興や驚きを表す感動語性の認められるもの(p148)」になるとする。これは一語文で意外性・驚きを表す点で確かに感動詞的でありつつも、「相手の発言を受け」ることを必須とするものであるから、やはりあくまで疑問詞としての用法の範囲に収まっている。これを《何》として意外性標識の一つに数える。

## 4.2 台本ごとの用例数

以上、狂言台本には4種の意外性標識があることを見た。ここで台本別の使用数を確認しよう。

表1 狂言台本の意外性標識

		何と言うぞ	何と	何じゃ	何
I	大蔵流・虎明本(1642)	3	28	2	3
	和泉流・天理本(1645頃)		14	2	2
II	鷺流・忠政本(1678)			2	
	狂言記(1660頃)			4	4
	狂言記外五十番(1700)		2	5	2

表1によれば、《何と》を多用する『虎明本』『天理本』と、対照的に《何と》がほとんど用いられず相対的に《何じゃ》の使用率が高い『忠政本』『狂言記』『狂言記外』に大きく二分することができる。便宜的に前者をI類台本、後者をII類台本として括る。

この差が何によるものかを明らかにするため、近世前期(18世紀前半)の資料における意外性標識の現れ方を確認してみよう。狂言同様に對話形式の舞台芸能として当時の口語を反映する世話浄瑠璃の類を見ると、《何と》《何じゃ》《何》に関しては、狂言台本で見た問い返し疑問の①～③に属するタイプと共起する例が得られた。

(15) a. 「ム、。只今いとまをやる迄は。ふぎしても大事なとのいひわけか。梅川などは遊女のはてそうしたことも有べきか。(略) 梅川

はむつとして。「なんと。遊女のはてはふぎするとや御前へはいか  
いすい様じや (紀海音・傾城三度笠、下)

- b. 「イヤ半七はきのふから頭痛するとて鉢巻で、小ざしきにねてゐま  
する 「なんじや頭痛じや、わかい身で又しては頭痛のつかへのな  
んのとは皆茶屋酒が過るから、かゆでもたいてくらはしたか  
(近松・長町女腹切、上)

- c. 「二つつれとぶ人だまをよそのうへと思ふかや、まさしう御身と我  
たまよ 「なになふ二人のたましひとや、はや我々はししたる身か  
(近松・曾根崎心中、三)

ただし、近世前期資料ではそもそも様相が変わってきており、単純な比較は難  
しい。例えば当期には、狂言台本には見られなかったタイプの問い返し疑問と  
共起するものや(→(16)の「～とな」など)、問い返し疑問が省略されている  
と考えられるもの(→(17))も見られる。近世前期の共時相を把握するにはさ  
らに調査の幅を広げて論じる必要がある。ここではひとまず、狂言台本と比較  
できる範囲のみを対象として議論を進めることとしたい。

- (16) 「いとまの状もやつたれはなんの帰らむかしぞ」と。いひにくそうにま  
ぎらかす。忠兵衛きもをつぶし。「何いとまの状をやりしとな。  
(紀海音・傾城三度笠、上)

- (17) 「サア其かねがござんせぬ。「ヤアなんとといわしやる御文には。道のつ  
かひもやるとじやが、但忘れてござつたか  
(紀海音・袂の白しぼり、一42)

上記のような状況の中で、《何じゃ》に関しては問い返し疑問①～③との共起パ  
ターンを多く見出だすことができる。

- (18) a. 「…ト庵様へはついなすびの浅づけで、茶づけをしんぜとおゑさま  
のいひつけ、早ふ帰つて御寝なつたがましでござる」とたらせ共、  
「なんじやなすびの浅づけじや、一段よからふ  
(近松・今宮心中、中／①-Aタイプ)

- b. 「エ、とゝさまはお煩ひかしらなんだ、いつからの事でござん  
する 「ヤなんじやおわづらひしらぬか  
(近松・心中宵庚申、中／①-Cタイプ)

- c. 福德の三年め乞食中間の仕合者。「おきよ、／＼」とゆすられてわん  
久ずつと立あがり。「なんじや此銭を主人がくるゝとや。  
(紀海音・椀久末松山、下／②-Bタイプ)

- d. 「まちつと先に見へまして、是からすぐにそねざきへ叶はぬ用とて  
ござりんした 「何んじやそね崎へ、なむ三宝おそかつた、せつし  
やも跡から参らずは成まい

(近松浄瑠璃・女殺油地獄、下／③タイプ)

一方で、《何と》は形式そのものが問い返し文脈にあまり出現せず、相手発話への反応で見られたのは(15a)と以下の(19)に限られる。

- (19) a. 「…さいはひ銀子はぢさんした。さらりと罅をいたして見しよ(略)  
善右衛門ふしんげに「ナント銀子をすまそとや。

(紀海音・二十五年忌、中)

- b. 「サア、おのれ斯うは云はなんだか 「イヤ／＼さうは言ひませぬ  
「ナント実正いはぬか

(近松・曾根崎心中、二)

(19a)は意外性標識と認めてよいと思われるが、(19b)は改めて二度目の問いかけを行ったものである(=問い返しではない)可能性があり、意外性標識と言えるか微妙な例である。この段階で《何と》の意外性標識としての典型的な現れ方はごく少ないと言ってよかろう。

狂言台本と同じタイプの問い返し疑問と共起するもの、さらに(16)(17)のように狂言台本には見られない問い返し疑問と共起するものも含めて意外性標識とみなすと、近世前期は以下のような分布を示す。

表2 近世前期資料の意外性標識

	何と言うぞ	何と	何じゃ	何
近松浄瑠璃(1703-1722)	2	1	14	3
紀海音浄瑠璃(1710-1715)	1	2	3	2

以上から、近世前期資料では《何と》がほとんど見られず、《何じゃ》が意外性標識の中心となっていることが分かった。ここから、II類台本は近世前期と連続的である——すなわち近世初期の実態を反映している可能性が高いと考えるべきであろう。逆に、I類台本は一段階前の中世後期頃の状態を反映していることが推測される。事実、中世の謡曲資料を紐解いてみると《何と》が多く使用されており、《何じゃ》は現れないという結果が得られる(用例(1a)も参照)。これは先述した断定辞「じゃ」の成立時期が15cであるという事実から考えても首肯できることである。

各台本をこのように位置づけたとき、近世前期資料の状況とも相まって、意

外性標識の通時的側面が垣間見られる。まず最も目立つのは《何と》の衰退である。このタイプは中世後期から近世初期にかけて一気に衰退したと思しい。その一方で、断定辞「じゃ」の成立を受けて新たに生じた《何じゃ》が勢力を伸ばす。このことは、当然ながら《何と》の衰退とも無関係ではなからう。I類台本に観察されるのは、まさにこの入れ替わりの過渡的段階に他ならない。

《何と言うぞ》は、他の意外性標識のように一語的・固定的なわけではなく[副詞+用言]という分析的な構造をなすものである。そのため、時代に応じた表現に姿を変えつつ常に存在し得たことが予測されるが、近世初期・前期を通して限られた出現にとどまっており、話しことばとしてどこまで一般的であったかは疑わしい部分もある。

《何》はI類・II類・近世前期資料すべてに安定して現れている。これは単なる名詞の一語文的用法であるから、疑問詞「何」が存在する以上はどの時代にも用いられて当然であって、表現としての存在自体は通時変化とは無縁なのであろう。

このように見ると、近世初期前後における意外性標識は、大局的には《何と》中心から《何じゃ》中心への転換期にあったと見ることができよう。

## 5 [意外性標識+問い返し疑問]

本稿の調査で得られた情報の範囲内で、より詳細な分析を試みたい。意外性標識と問い返し疑問にはそれぞれ複数の表現タイプが見られたが、その組み合わせを以下にまとめる。まずはI類台本の用例を一括して示そう。

表3 I類の[意外性標識+問い返し疑問]

	①			②		③
	体言+か	体言+じゃ	用言+か	～と言うか	～とや	φ
何と言うぞ	1			2		
何と		6	4	22	1	9
何じゃ		2				2
何		2			2	1

表3からは、引用マーカを含む《何と言うぞ》《何と》は、同じく引用タイプである〈～と言うか〉と共起しやすいことが明らかに見て取れる。その一方でこれらは〈体言+じゃ/か〉との共起率が相対的に低く、意外性標識と問い返

し疑問は形態的に一致するものが共起しやすいことを示唆している。この仮説によれば《何じゃ》は「体言+じゃ」との相性がよいことが想定されるわけであるが、実際に表3はそれに矛盾しない結果を示している。もとより〈体言+じゃ〉全体の用例数が少数に過ぎるきらいはあるが、《何と》との共起が多い〈～と言うか〉タイプとの共起が《何じゃ》にはないという事実は重視すべきであろう。ここから、近世以降勢力を伸ばす《何じゃ》は、〈体言+じゃ〉との共起を入り口として意外性標識としての勢力を拡大していった可能性が浮上する。

表4 II類の[意外性標識+問い返し疑問]

	①			②		③
	体言+か	体言+じゃ	用言+か	～と言うか	～とや	φ
何と言うぞ						
何と				2		
何じゃ		1		3		7
何		1	1			3

II類で注目されるのは、《何じゃ》がI類に見られなかった〈～と言うか〉と共起するようになってきていることと、〈φ〉の用例を増加させていることである。

この点については、《何と》の衰退との関連で説明を与えることができる。すなわち、《何と》が衰退すれば、その共起パターンの中心にあった〈～と言うか〉タイプも減少する。その分《何じゃ》がその領域を補いつつ、さらに元々共起可能であった〈φ〉を増加させて[意外性標識+問い返し疑問]全体をカバーしたのである。

近世前期において明らかに《何じゃ》と〈φ〉の共起が多いという事実も、その仮説を補強するように思われる。

表5 近世前期資料の[意外性標識+問い返し疑問]

	①			②		③	他
	体言+か	体言+じゃ	用言+か	～と言うか	～とや	φ	
何と言うぞ							3
何と			1		2		
何じゃ		3	3		1	9	1
何							2

以上のように考えると《何と》の衰退⇔《何じゃ》の拡大は、意外性標識の形式的入れ替わりという範囲に収まらず、問い返しの方法そのものに変化を生じさせた可能性がある。前後の時代を含め、大きな展開として確認していくことが必要となろう。

## 5 まとめ

本稿では、疑問詞「何」に基づく意外性標識の歴史的変化にアプローチする上で必要な手続きとして、まずは狂言台本における当該表現の実態調査を行った。ここまで明らかにになったことを、改めて以下にまとめ直す。

- (16) a. 同時期の狂言台本でありながら、『虎明本』『天理本』と『忠政本』『狂言記』『狂言記外』は資料性の異なるものと考えなければならない。前者は中世末期、後者は近世初期の様相を反映していると考えられる。
- b. 近世初期の共時的側面としては、《何じゃ》が意外性標識の中心をなしていた。それに比して《何と》の使用率はきわめて低い。
- c. 台本間の差異から得られた通時的現象に目を向けると、中世後期から近世初期にかけてが《何と》衰退のタイミングにあたり、その要因もしくは結果として《何じゃ》の台頭がある。これは断定辞「じゃ」の成立に伴う現象と言える。
- d. 《何じゃ》は〈体言+じゃ〉という形態的（構造的）に一致する問い返し疑問との共起を契機として意外性標識の領域に踏み込み、その後、それまで《何と》が担っていた領域を侵食していく。

きわめて用例数が限られた中での話であって、本稿で得られたのは可能性とそれに基づく仮説にすぎない。あくまでこれを出発点と位置づけ、ここから補強・修正を加えつつ意外性標識の歴史全体を解明していきたい。

## 参考資料

### 【狂言台本】

虎明本……………北原保雄・池田廣司『大藏流虎明本狂言集の研究 本文編上・中・下』表現社

天理本……………北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』（勉誠社）

忠政本……田口和夫（1979）「鷺流狂言『延宝・忠政本』翻刻・解説」『静岡英和女学院短期大学紀要』11

狂言記……北原保雄・大倉浩『狂言記の研究 上・下』勉誠社

狂言記外……北原保雄・大倉浩『狂言記外五十番の研究』勉誠社

#### 【近松浄瑠璃】

曾根崎心中、薩摩歌、心中二枚絵草紙、卯月の紅葉、堀川波鼓、卯月の潤色、重井筒、心中万年草、丹波与作待夜のかむろふし、淀鯉出世瀧徳、五十年忌歌念仏、心中刃は氷の朔日、今宮心中、冥途の飛脚、夕霧阿波鳴渡、長町女腹切、大経師昔暦、生玉心中、鍵の権三重帷子、寿の門松、博多小女郎波枕、心中天の網島、女殺油地獄、心中宵庚申……『近松世話物全集』富山房

#### 【紀海音浄瑠璃】

腕久末松山、おそめ久松袂の白しぼり、傾城三度笠、八百やお七、三勝半七二十五年忌、心中二ツ腹帯……『紀海音全集』清文堂

#### 参考文献

安達太郎（1989）「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8-8

沖森卓也（2015）「感動詞と応答 新情報との遭遇を中心に」『感動詞の言語学』ひつじ書房

近藤研至（2001）「「意外である」ということと「問い返し疑問」について」『言語と文化』14

信太知子（1998）「「である」から「じゃ」へ——断定の助動詞の分離——」『神女大國文』9

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院



(要旨)

本稿では、相手の発話に対して意外性を標示する際、疑問詞「何」に基づく一語文的表現が問い返し疑問に前置されることに着目し、その“意外性標識”の歴史へのアプローチの端緒として18世紀成立の狂言台本における実態調査を行った。まず、同時期の狂言台本間には反映する時代の差があることを明らかにし、中世末期の様相を示すものをⅠ類、近世初期の実態が読み取れるものをⅡ類台本としてそれぞれ位置づけた。近世初期の中心的な意外性標識は《何じゃ》であり、これは中世末期に多く見られた《何と》を襲う形で勢力を強めたものと考えられる。狂言台本と併せて近世前期資料を確認すると、断定辞「じゃ」の成立とともに生じた《何じゃ》は、〈体言+じゃ〉という形態的・構造的に一致する問い返し疑問との共起パターンを入り口として意外性標識の領域へと侵入し、次第に使用の幅を拡大していったことが読み取れる。